

## 陶冷月について（補遺）

鶴田武良

先に拙稿「陶冷月について―近百年來中国絵画史研究三―」（本誌三百五十八号）において、「陶冷月の名は、今では中国でもほとんど忘れ去られているし、その作品を知る人もいないようである」と述べ、その生涯については一九七一年三月、七十七歳までの生存を確認した。

その拙稿を、『中国美術期刊過眼録』及び『中国美術社団漫録』の著者許志浩氏<sup>(1)</sup>のところで披読された陶冷月の第七子陶為衍氏<sup>(2)</sup>から、本年六月、多量の陶冷月関係記事の電子複写の送付を受け、続いて八月、上海で同氏所有の多く関係資料を披閲する機会を得たので、それらに拠って先の拙稿を補い訂しておきたい。

なお、筆者は見落としていたが、民国期の資料では『清代画史・補編』<sup>(3)</sup>に約百字の略伝が載せられている。

解放後の陶冷月についての論評は、一九六三年（日付不明）の香港『大公報』に見える紙張銅瓶室主（鄭逸梅）「黃賓虹與陶冷月的友誼」を恐らく最初に、その後十数年の空白を置くが、一九七九年九月以後、『文匯報』、『蘇州報』などに冷月に関する逸話がたびたび掲載されている。わけても冷月の九十誕辰を記念して上海、蘇州で回顧展が行われた八四年には目立って多い。

それらの中では、八三年六月十二日付『蘇州報』の陶冷月「憶我的老師羅樹敏先生」、『美術史論』八五年二期の上海社会科学院姚全興「陶冷月―推陳出新的老画家」、冷月と同郷、同年の鄭逸梅<sup>(4)</sup>が香港の雑誌『大成』一五〇期に発表した長文の評伝「陶冷月與新中国画」、中国人民政治協商會議蘇州市委員会編『蘇州文史資料選十三輯』（一九八四年十月内部発行）の韋宏（陶為滋）「記国画芸術家陶冷月」などが重要である。

『冷月画評』<sup>(5)</sup>は、その書名の通り、冷月及び冷月作品に寄せられた評を編集したものである。巻頭に李根源、蔡元培、吳敬恒、章炳麟、于右任、葉楚傖など六人の題字、聯、題詩を置き、次に『清代画史・補編』の「陶冷月小伝」と『冷月画集』所載の「陶君冷月小伝」を転載する。

次に冷月への評語と作品に題された詩詞を贈言、題詩、題詞、題図、評論の五部に分け、それぞれ発表年順に編みである。五部を通して最も早いものは民国十三年（一九二四）七月、無錫梁溪公園の池上草堂で開いた個展の評であるから、その展覧会が画家陶冷月の名を高め、広める大きな契機となったものと考えられる。

陶冷月の生年は光緒二十一年（一八九五）九月十九日。原名は善鏞、少しく長じて鏞と改めた。字は詠韶。号は宏斎、五柳後人、柯夢道人。伯祖陶詒

挿図1 風景 油彩 一九一〇年代

孫は王学浩に学んで四王風の山水を善くし、呉大澂と陸恢に教えたことがある。冷月は幼いころ、陶詒孫に寵愛さ

れ、四、五歳のころから画筆を玩んだ。しかし、本格的に絵画を学び始めたのは光緒三十二年（一九〇六）、蘇州元和県高等小学に入学して美術教員羅樹敏に出会ってからである。羅樹敏は元和県高等小学以外の学校でも教えていて、また自宅では画塾を開いていた。そこは冷月の家から数十軒しか離れていなかったのだ、しばらくして冷月も通い始めた。塾では十数名が学んでいたが、その中に後に画家として高名を得た樊少雲、呉湖帆、顔文樑がいた。

羅樹敏は国画のほか水彩画、鉛筆画、素描を教え、とくに透視と投影について詳しく説明したが、それについては皆よく理解できなかったと、陶冷月は述べている。

羅樹敏については、『中国美術家人名辞典』<sup>(6)</sup>に引く、鄭逸梅の「陸恢に山水を学んでその神髄を得、西洋画を作ってはまた妙れて姿態を具えた」という評のほかには見当たらず、その西洋画法、とくに透視法と投影法の知識が

挿図2 牡丹図 水彩 一九一二年

何に由来するかは分からない。

中国での透視法、投影法の紹介は、アンドレーア・ボツツォの『Perspectiva Pictorum et Architectorum』（絵画と建築の遠近法）を主にして雍正七年（一七二九）に年希堯（？一七三八）が『視学精蘊』（のち『視学』と改題）を刊行した後、民国六年（一九一七）沈良能が仏人 Armand Casagne の著書を『透視学』の名で出版するまで途絶えている。しかし、その間に John Fryer の著書が『器象顕真』（一八七二年）、『画形図説』（一八八五年）、『画器須知』（一八八八年）の名で刊行されており、光緒二十八年（一九〇二）にはやはり John Fryer の『A Primer of Western Painting』が『西画初学』として刊行されているから、それらの書物に拠ったものである可能性がある。

光緒三十四年（一九〇八）、陶冷月は江蘇両級師範学堂本科第一期に入学、民国元年（一九一二）に卒業すると、元和県高等小学教員になり古文と美術を担当した。この頃、数年にわたってアメリカ人特朗（原綴未詳）<sup>ドラン</sup>に就いて油画を学んだ。顔文樑も一緒であったという。また、たびたび上海に出ては画集を求めた。

挿図3 月景図 一九八二年

姚全興は、冷月は十五歳から売画を始めた、というから、江蘇高級師範在学中のこととなる。

冷月青年期の作品では、一九二二年作の水彩「牡丹図」(挿図2)と一九一〇年代と推定される油画風景画(挿図1)が、陶為衍氏のもとに残っている。牡丹の花と葉、枝の陰影法による立体感の表現は巧みで、細部まで描き込んでいる。

一九一〇年代に洋画を学んだ画家たちの学画の過程を示す作品は、ほとんど紹介されていないので、これらは貴重な資料といえよう。

民国七年(一九一八)、冷月は湖南省長沙の雅礼大学芸術系教員に迎えられた。この前後、三年に渡って明月の夜毎、夜を徹して月影の下の風景を観察し、月下の景物を描く画法を体得した。雅礼大学の外籍米教授が、その月景図を見、称賛して「Cold Moon」と評したのに因んで、冷月と署し、英語の音に倣って柯夢道人<sup>コームン</sup>と号した。

民国十一年(一九二二)から民国十八年まで、国立暨南大学芸術系教授を勤めたが、その間に、呂鳳子、謝公展と私立南京美術専門学校の創設に関わった。

民国十八年(一九二九)秋、開封中山大学に迎えられて美術講座を担当した。この時の学生に、解放後『画史叢書』を編集した于安瀾がいた。民国二十年、国立四川大学芸術系教授に招かれ、赴任の船中で黄賓虹に会い、後に窮境に陥った黄賓虹を四川大学に招いた。

民国二十一年(一九三二)、上海事変の勃発など国内が騒然としてきたので上海に移り、そこに定住した。

解放後、一九五二年上海復興中学の美術教員に任ぜられ、五五年五愛中学に移り、六一年退休した。

その間、一九五六年の「第二回全国国画展」に「紅梅図」を出品し、同年の「第一回上海美術展」では「白梅図」が二等賞を得たが、その後は展覧会に参加しなかった。解放後の、社会主義リアリズムが美術界を覆い尽くしてゆく中で、陶冷月の得意とした月景図は、人々の関心を引くものではなくなっていたのであろう。

一九五八年、反右派闘争が始まると、陶冷月は右派として攻撃されたが、六二年に名誉を回復され、以後は自宅で教えながら、ごく稀に作画した。四九年以後は伝統的な山水、花卉を描き、毛沢東の詩意を主題とすることが多かったが、文化大革命が終わった七六年からは、再び月景図や西洋画法を応用した作品が多くなった。一九八二年八十八歳の「月景図」(挿図3)は水墨だけで描いたもので、珍しい作例である。しかし、八四年、白内障が悪化してからは筆を執ることはなかった。

一九八四年、陶冷月九十誕辰を祝って上海文史研究館及び蘇州博物館は、「陶冷月画展」をそれぞれ開催した。同年末、陶冷月は上海博物館に八幅、蘇州博物館に五幅の精品を贈った。八五年十二月三日、蘇州市群衆芸術館で「陶冷月暨弟子画展」が開幕したが、その日に、陶冷月は亡くなった。九十一歳であった。遺骨は蘇州東山の華僑公墓に葬られた。墓誌は鄭逸梅の撰文、銭君匋の書。

なお、陶冷月が中国美術家協会上海分会に入会を認められたのは、一九八三年であった。一九五三年九月、中国美術家協会が発足すると、民国期に活躍し画名を得ていた画家の多くが相次いで加入を認められていることを考えると異例といえよう。陶冷月の月景図を主とする作品と画風が社会主義美術の路線を進んでいる解放後の中国では無益のものと考えられたためではないだろうか。

註

- (1) 上海在住。『過眼録』は一九九二年、『社团漫録』は一九九四年刊、いずれも上海書画出版社発行。
- (2) 一九四四年生まれ。冷月は為治、為渝、為澧、為滋、為衍、為浚、為淦の七男と梅玲、正玲の二女、計九子を儲けた。
- (3) 民国二十二年(一九三三) 編。
- (4) 一八九五―一九九二。原名鄭際雲、号逸梅、別に紙帳銅瓶室主と署す。江蘇省蘇州の人。若くして南社に参加、一九二〇年代から教育に携わるほか雑誌の編集に従事。短文をよくした。著書は『南社叢談』『逸梅叢談』『藝林散葉』『上海旧話』ほか多数。
- (5) 陳建中編、民国三十四年、冷月画室刊 B6判、七十三ページ。
- (6) 俞劍華編、上海人民美術出版社、一九八一年刊。

挿図4 陶冷月潤格

挿図5 陶冷月 1974年撮影

## 図版要項

一 十亀広太郎筆 顔 大正三年 (原色刷)

東京国立近代美術館蔵

油彩 キャンバス 縦六〇・五cm 横四五・三cm

二(a) 同 風景 大正三年頃 (原色刷)

油彩 キャンバス 縦四一・二cm 横五三・二cm

(b) 同 眠る女 大正三年頃 (原色刷)

油彩 キャンバス 縦四一・〇cm 横五三・三cm

一・二 田中淳「十亀広太郎筆 顔」参照

三 伝銭選筆 瓢壺図

京都国立博物館蔵

絹本着色 縦四七・七cm 横二九・一cm

宮崎法子「中国花鳥画の意味―藻魚図・蓮池水禽図・草虫図の寓意と受容について

―」参照

四 如拙筆 王羲之書扇図

京都国立博物館蔵

紙本墨画 縦八三・一cm 横三二・六cm

島尾新「ドキュメントとしての絵画―『王羲之書扇図』の画と詩―」参照